

キヌサヤエンドウ新品種「紀州さや美人」の生育後半（2回目以降）の追肥施用について

1. はじめに

当センターで育成したキヌサヤエンドウ品種「紀州さや美人」は、莢の品質が高く果梗への小ほう（ハカマ）の発生が少ない品種で、出荷調製時における小ほう除去作業の省力化が期待されています。一方、従来品種の「美笹」に比べてやや収量性が劣るとの指摘があるので、夏まき年内どり栽培における生育後半の収量増加を目指して生育後半（2回目以降）の追肥の施用法について検討しました。

2. 材料および方法

露地圃場において2012年8月23日に播種し、基肥として窒素成分6 kgN/10aを施用しました。初めの追肥は9月27日に4 kgN/10aを施用しました。そして、生育後半の追肥施用時期として、①前期重点区（10月11日、25日、11月6日に2 kgN/10aずつ施用）、②後期重点区（11月21日、12月6日、20日に2 kgN/10aずつ施用）、③均等区（①+②の日に1 kgN/10aずつ施用）という3処理区を設け、総施用量6 kgN/10aをそれぞれの日に等分して施用しました。また、対照区として「美笹」（10月25日、11月29日に3 kgN/10aずつ施用）を供試し、調査を行いました。

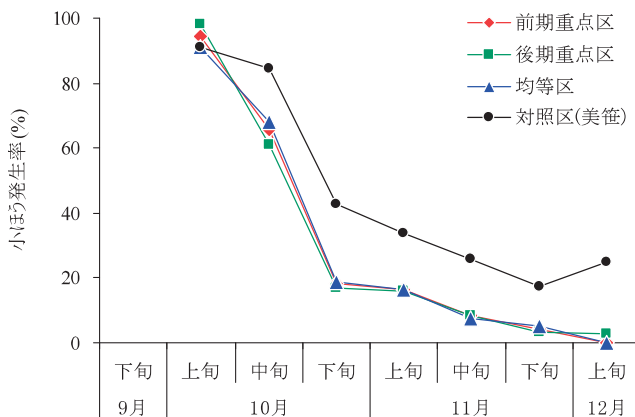


図1 追肥施用時期と小ほう発生率との関係

3. 試験結果

「紀州さや美人」では、いずれの処理区でも、10月下旬には既に小ほう発生率が大幅に低下しており、生育後半の追肥施用時期による差異は認められませんでした（図1）。

12月上旬に強い霜害に遭って収穫を終了したため、以後の収量は未知数ですが、最も総収量が多かったのは均等区でした（図2）。特に、10月中旬～11月中旬には、均等区は前期集中区の半分量の追肥しか施用されていないにもかかわらず、期間を通じて前期集中区を上回る収量を維持していました（図2）。

4. まとめ

以上の試験結果から、夏まき年内どり栽培における「紀州さや美人」の収量アップには、生育後半の追肥を特定の時期に集中させるのではなく、期間を通じて少量ずつ施用する方が適当と考えられました。このように草勢を落とさず管理するためには、追肥の少量多回数施用のほか、緩効性肥料の利用なども効果的だろうと推定されます。

（園芸部 松本 比呂起）

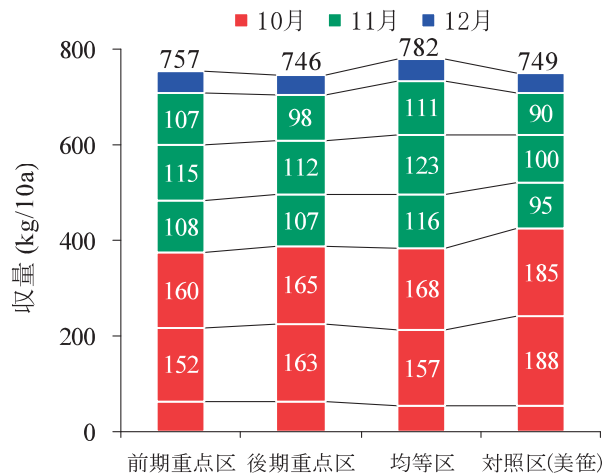


図2 追肥施用時期と時期別収量との関係
同色内での区分線と数字はそれぞれ下段からその月の上旬・中旬・下旬と、その期間の収量を表す